２０１５年（平成 27）１０月１３日

２０１５世界マスターズレガッタ（WRMR）参加報告

国際審判　東　乙比古
（北海道ボート協会）

９月１０日（木）から１３日（日）まで Hazewinkel，Belgium で開催された FISA の世界マスターズレガッタ（以下、WRMR）に審判参加させていただいたので報告いたします。

参加にあたり色々とご面倒をおかけした日本ボート協会事務局の皆様、とりわけ相葉事務局次長、苅谷さん、竹内さんと、私を推薦してくださった国際委員会千田委員長、審判委員会上野委員長に厚く御礼申し上げます。

１．ロケーション

ボートコースの Bloso-centrum Hazewinkel はブリュッセルとアントワープの中間に位置し、ブリュッセル空港から 27㎞、高速道路で 25 分程にある。審判及び役員の宿舎であるホテル：Crowne Plaza Hotel はアントワープの町はずれにあり、会場まで高速道路利用で 30 分程と大変便利な場所にあった。ただ、大会最終日１３日の帰路、空港に向かう高速道路が交通事故で大渋滞した。幸い土地勘のある国内審判（NTO）が運転手だったため、下道をくねくねと抜けて空港へ。ヨーロッパに住む国際審判（ITO）仲間は無事家路についたことだろう。

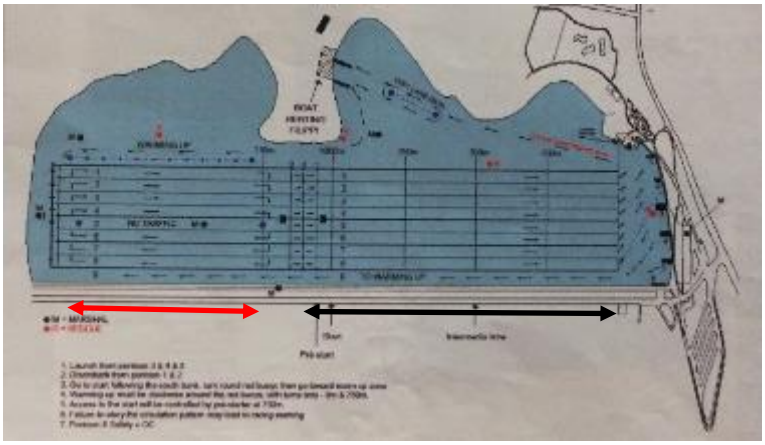
審判業務を終えてホテルに戻るのが毎日 20 時半を過ぎることから、アントワープ市内に繰り出すことができなかった。今回も外国の風土や生活に触れる機会を持てなかったのは残念だった。

２．ボートコース

Bloso Hazewinkel はオリンピックが開催可能な８レーンを有する立派な 2000m コースと施設・設備を備えている。過去に二度世界選手権（WRC）を開催したヨーロッパの名コースである。

レースコースは 2000m コースの後半 1000m をコースとして設定されていた（図中“黒矢印”）。従って、前半の 1000m（“０ｍ”より上流）はウオーミングアップ・ゾーンであった（図中“赤矢印”厳密には－100m にある Prestart の上流部分）。フィニッシュラインの後方に出船三本、入船二本の桟橋が設置されていた。

回漕レーンの一角に Filippi のレンタルボート・エリアがあり、日本から参加した三菱ボートクラブや瀬田漕艇クラブ、団塊号などの各クルーはレンタル・エリアから出艇していた。



左端が 2000mｽﾀｰﾄ、中央に 1000mｽﾀｰﾄ、右端がﾌｨﾆｯｼｭ。
中央上部の入り江はﾚﾝﾀﾙﾎﾞｰﾄｴﾘｱ

500mからｽﾀｰﾄを望む。中央に発艇台（赤丸）と垂下式のｽﾃｯｷﾎﾞｰﾄ。奥が 2000mﾚｰｽのｽﾀｰﾄ

ﾌｨﾆｯｼｭと施設群。左手の建物がﾌｨﾆｯｼｭ・ﾀﾜｰ。ﾃﾝﾄはﾎﾞｰﾄﾒｰｶｰ等の出店。右手二階建ては艇庫

２．レース運営

１）WRMR

私の WRMR への参加は 2006 年のプリンストン／USA 大会に続いて二回目である。このレガッタは国別ではなくクラブ対抗の色合いが濃く、今回のエントリー数は世界中の６１７クラブから３８００を超えるエントリー（クルー）があった。中でも M１×の D クラス（MD1×、５０～５４歳）は１４８クルーのエントリーで、このクラスだけで８杯レースが１５回も続いた。MG１×（６５～６９歳）には瀬田ローイングクラブの安達さんが出漕し、７杯レースの２位以下に大きく水を開けてトップでゴールされた。安達さんは一クラス若い MF１×でも優勝されたというので、大変に嬉しく思った。

因みに今回の最高齢は９４歳。2006 年の最高齢者が当時８５歳だったから、恐らく同じ選手が今年も元気にオールを握っていたのかもしれない。

2006 年大会は凡そ３２００エントリーで、８＋と４×、４－、４＋は３分間隔、その他は４分間隔で行われたと記憶する。しかし、今大会は３８００を超えるエントリーのためか、全レースが３分間隔の超過密スケジュールで行われた（途中で三回 10 分間のレギュレーションタイム：部署交代時間あり）。9 月 10 日は午後に８２レースが、翌 11 日は８時から２０８レース、12 日は２０２レース、最終日は７１レース（＋１）の計５６３レース（＋１）が行われた。日々のレースが終わるのは、最終日を除き１９時前後であったが、レース運営は綿密に計画されていて大きなトラブルもなく終了できた。

“＋１”とは、最終日の最終レースの後に企画される審判団対 OC のスペシャル・８＋レースのことである。今回は NTO の１クルーを加えた三杯で 500m を競った。私はプリンストンではスペシャルレースのスターターを務めたが、今回は判定棟の屋上からギャラリーとして拍手を送った。

ついでに生活パターンを紹介しよう。朝５時起床、６時朝食、６時１５分ホテル発、６時４５分ミーティング、７時１５分には配置完了、である。帰路はコントロール・コミッションが最も遅い店じまいのため、それを待ってのホテル戻りとなる。開会式や野外パーティー含めて２０時半頃にホテル戻りだ

った。

２）審判団

大会の審判団は、２４名の FISA 召集の国際審判員（ITO）と、ベルギー・オランダ・イギリス等欧州を中心に世界各国から集められた２４名の NTO で組織された。ITO と NTO は区別されることなく配置されたが、Starter、Judge at the Start、Resp. Finish、Resp. Control Commission 及び三杯の Umpire は ITO がほとんど勤めていたように思う。

総勢４８名の審判員は日々４シフト（組）に分けられた。例えば、第１組は 08:00～10:43 スタートのレースに執務、(10 分間の部署移動)、以降、第２組 10:53～13:25、(10 分間の部署移動)、第３組 13:35～16:10、(10 分間の部署移動)、第４組 16:20～18:54 である。日々二回の執務が割り当てられたから「１組＋３組」か「２組＋４組」の組み合わせである。とはいえ、私は自分の次の業務がどのように行われるのか予習するために、次の業務場所を手伝うことにしたので、かなりの時間業務に就くことになった。

ITO、NTO ﾒﾝﾊﾞｰ。右端が審判長の De Jonge Yves、二人目が副審判長の Sautois Roland、最前列左端が筆者

３．審判業務

審判として次の業務を行った。(時刻はレースのスタート時刻)

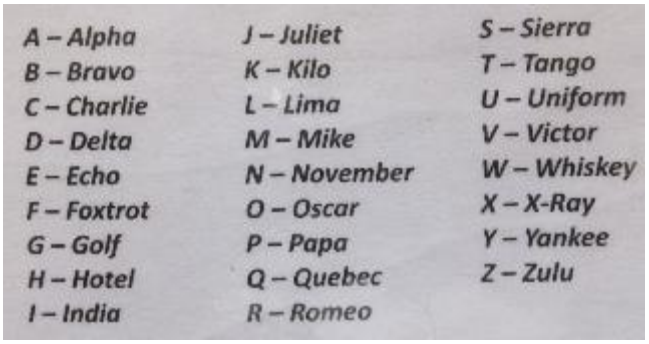
９／１０（木）	10:00～15:48、15:58～18:26	: Checkpoint Charly
９／１１（金）	08:00～10:43、10:53～13:25	:（Finish &）Resp. Finish
	13:35～16:10	: 待機
	16:20～18:54	: Umpire ２（500m）
９／１２（土）	08:00～10:26、10:36～13:14	: Control Commission ３（出船桟橋）
	13:24～15:49	: Prestarter （-100m）
	15:59～18:33	: 待機
９／１３（日）	09:00～11:20、14:30～15:00	: 待機（Special Race）
	11:24～13:30	: Umpire １（150m）

１）安全監視（マーシャル）

マーシャルも審判団の業務である。ウオーム・アップ・エリアを含めた全長 2000mコースの全体に５人のマーシャルが張り付いた。中でもスタートに向けて遡上するクルーの通過を確認、チェックするマーシャルは特別に“Checkpoint Charlie”と呼ばれ、トランシーバーの交信も「チェックポイント・チャーリー、チェックポイント・チャーリー、･･･」と呼びかけられた。日本語で言うところの「慣用句」とでもいうのだろうか、私が執務した時でも「チェックポイント・オトヒコ」とは呼ばれなかった。ほ

かの部署間の交信は、日本と同様部署名で呼び合うのだが、この「チェックポイント・チャーリー」だけはなじめなかった。Checkpoint Charly は Prestarter と連携してウオーム・アップ・エリアに入ったクルーを把握するという重要な役割がある。しかし、対岸のレンタルボート・エリアからスタートに向かう艇までもチェックしなければならず、いくつか見落としが生じた。オリンピックや世界選手権ではある瞬間に水上に出ている艇数は４６杯とのことだが、今大会では１６０杯以上になったらしい。Checkpoint Charly はとても一人で務まる部署ではないので、私は応援要員として終日執務した。

バウ・ナンバー・プレートにはアルファベットのＡからＺに加えて１から８までの枝番が付けられた。例えば“Ａ５”や“Ｚ８”である。アルファベットには全て“key phrase”があり、“Ａ５”は「Alpha five：アルファ・ファイブ」であり“Ｚ８”は「Zulu eight：ズールー・エイト」である。因みに“Zulu”とは「アフリカ南部の種族＝ズールー族」であるが、このようになじみない key phrase ばかりで、大会期間に全てを記憶することはできなかった。



２）判定

Resp. Finish（主席判定員）はほぼ３分間隔でフィニッシュするレースの着順を見極め、記録し、公式記録をチェックしてレース成立を承認するのが仕事である。

私の執務中に、Ｍ２×のレースが前レース（Ｗ１×）の遅れているクルーを追い越すという“珍事”に遭遇した。W1×の７杯レースの内の６杯がフィニッシュした。フィニッシュ前のコース内に誰もいないことから、１杯は棄権したのだろうと着順の読み合わせを始めた。その時、写真判定システムの技術者が「500m 地点で何かやっている」と。双眼鏡を覗くと、500m 地点に競漕艇が９杯見えるではないか。その後方では主審艇二杯が漕舵指示をしている。あやうく W1×を棄権扱いするところであったが、次のレースが先に成立し、遅れてその W1×が無事フィニッシュした。それにしても良く衝突せずに全艇無事にフィニッシュしたものと胸をなでおろした。

右が主席判定員、左が判定員

３）主審

３分間隔でレースが行われるため、３杯の主審艇は 150m、500m、850m の１レーンのコース外でレースを注視し航跡を確認することになる。何事もなければ船外

三菱ｼﾆｱ・森正義氏提供。主審艇：エンバッハ

機を起動して主審艇を動かす必要はない。私はこの業務中に白旗を上げたのは一度だけであった。クルーは皆それぞれのレーンを確実に進んでいた。

４）コントロール・コミッション

出船の監視員は選手個々の ID カードで本人チェックをすることが最大の職務である。その他にもバウナンバー・プレートは勿論のこと、ヒール・ロープの確認も行うよう指示されたが、ひっきりなしに船台に来るクルーの全てに一人で対応するのは至難の業であった。

私の執務中に選手交代したクルーがあり、その選手の ID チェックはしたものの生年月日の確認を怠り、平均年齢がクラス区分に適合しているかを確認できないミスを犯してしまった。そのクルーがトップでゴールしていれば表彰桟橋でチェックされたことだろう。

５）Prestarter

スタートの 100m 上流に Prestarter のポンツーンが設置されていた。Prestarter はスタートに向かう艇をコントロールするのが役目である。「Quebec 3(Q3)! Go to the start area!」とか「Foxtrot 2 (F2)! Come to the Prestart!」などと拡声器片手に声掛けするのである（“Foxtrot” はキツネのこと）。２レース後までの、多い時は１６クルーを Prestart の傍に呼び寄せ、接触等の危険を回避しながら順にスタートへ送り出す二時間半の仕事は、今大会で最もハードであった。

仮設発艇台と垂下式のｽﾃｯｷﾎﾞｰﾄ

Prestart は仮設のﾃﾝﾄ屋根付きﾎﾟﾝﾂｰﾝ（写真なし）

垂下式ｽﾃｯｷﾎﾞｰﾄ。二本のﾌﾛｰﾄにｱﾙﾐ製と思われる枠を乗せ全体をｽﾁｰﾙﾊﾟｲﾌﾟでぶら下げている

４．終わりに

大会初日の夜に行われた Opening Ceremony で FISA 新会長の Jean-Christophe Rolland さんから国際審判の“シニア・バッジ”をいただきました。今年６５歳になる欧米の審判仲間４人と一緒の卒業式でした。三菱シニアで来ておられた国際審判大先輩の佐々木亨さんが国際審判を卒業されたときは、郵送されたようなので、会長直々にいただき大変に名誉なことと感激しています。

続けて、８０歳以上の参加者１０数人に「特別のメダル」が授与されましたが、日本の方達が多かったようです。今回の大会には日本から、ボート団塊号、JAPAN･BC、三菱シニア BC、名古屋 RC、濃青会鶴見川、瀬田 RC、淡青会マスターズ、魚崎 RC、W.K.マスターズ・JAPAN の９団体（クラブ）が参

加され、計７４レースに出漕されました。生涯スポーツとして楽しまれていることを実感した大会でした。

今回の遠征を最後に FISA 及び ARF の大会参加を終えることとなりました。1994 年の国際審判試験合格からこれまで、海外遠征の機会を与えていただいた日本ボート協会の関係各位に、心から御礼を申し上げて WRMR 参加の報告といたします。

左：Rolland 会長からｼﾆｱ・ﾊﾞｯｼﾞを授与される筆者。右：右端の FISA 審判長 Patrick Rombaut、と Rolland 会長に挟まれている４人が今年国際審判を卒業する　（写真は三菱ｼﾆｱ　森正義様提供）

以上